

愛野向山古墳群

A-5・6号墳発掘調査報告書

2021

静岡県袋井市教育委員会



愛野向山古墳群A-5・A-6号墳 遠景（北より）

例 言

1. 本書は、静岡県袋井市愛野に所在する愛野向山古墳群A-5・A-6号墳及び愛野向山Ⅲ遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、住宅建設用造成事業に先だって すぎや不動産株式会社（代表取締役 中島学）より委託を受け、袋井市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は袋井市愛野字向山2368番地を対象として実施し、その調査面積は443.66㎡である。
4. 発掘調査は袋井市教育委員会生涯学習課の水野雅彦を調査担当者とし、静岡県スポーツ・文化観光部文化局文化財課の指導を得て実施した。
5. 発掘調査期間及び資料整理期間は下記のとおりである。

現地調査 令和2年10月9日～令和2年12月10日

資料整理 令和2年12月11日～令和3年3月19日

6. 発掘調査および本書の発刊に係わる事務は袋井市教育委員会生涯学習課文化財係が担当した。

7. 発掘調査体制

発掘調査実施機関 袋井市教育委員会

教 育 長	鈴 木 一 吉
教 育 部 長	伊 藤 秀 志
生涯学習課長	村 田 秀 明
生涯学習課主幹	白 澤 崇
文化財係長	水 野 雅 彦（担当者）
主任主査	
学 芸 員	原 未 貴
通年パートタイム 会計年度任用職員	永 井 義 博
会計年度任用職員	鈴 木 寿 美 子

8. 本書の編集及び執筆は水野が行った。
9. 本書で用いた調査区全景写真は有限会社アンスクにより撮影されたもので、遺構は水野が撮影したものである。
10. 本書に使用した遺構の実測図は、有限会社アンスクが行った写測図を使用したものである。また、土層断面図や遺物出土詳細図等については水野が作成した。
11. 発掘調査によって出土した遺物や関係資料・記録はすべて袋井市教育委員会が保管している。
12. 発掘調査・資料整理従事者
山本博、中山久美子、戸倉恵美子、田中誠、行澤八郎、行澤歩（順不同・敬称略）
13. 発掘調査にあたっては下記の方々にご教示、ご協力を賜った。

中島学、朝比奈馨、兼岡正利、海野 純、藤原隆士、長谷正弥、福代重直、永田泰豊、紅林勝、株式会社松下組、株式会社八ヶ代造園、有限会社アンスク（順不同・敬称略）

凡 例

1. 挿図中のレベルは海拔、方位・測量図については国土座標真北（世界測地系）を使用している。
2. 本書で用いた色彩に関する用語、記号は新版『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修1993）をもとに標記した。
3. 遺構平面図・断面図の縮尺は、図中にスケール等で示した。
4. 挿図中で「S」は礫、「C」は炭化物を示す。
5. 本書で用いた須恵器・土師器編年及び暦年代については、下記文献などを参考にしながら、次表のとおりとした。

時代区分・暦年代			陶器・磁器	須恵器系須恵器	通考須恵器	川江編年	瀬西系須恵器	近江編年
古 墳 時 代	中 期	5 世 紀	400年	TK232型式				
			TK231型式	ON231号窯跡層				
			TK73型式	OM231型式 TK73型式 新				
			412年	TK216型式	H-111		I	
			TK208型式	ON45号窯跡層 TK208号窯跡層	H-48			
			471年	TK23型式	城山2			
	後 期	6 世 紀		TK47型式	H-11			
			500年	MT 1.5型式	H10	II期	II期	
			TK10型式	TK10号窯跡層 MT20号窯跡層	H-61			
			588年	TK43型式	飛鳥寺下層	III期	III期	
			600年	TK209型式	飛鳥 I			
			616年	TK217号窯				
代 終 末 期	7 世 紀	終 末 期	645年	TK217型式	吉野陶			
			648年	TK217号窯	飛鳥 II			
			660年	TK217号窯	飛鳥 III			
			682-685年	TK46型式	飛鳥 IV			
			694-710年	TK48型式				
			701-710年	MT21型式	飛鳥 V			
奈 良 時 代	8 世 紀		716-725年		平城 II			
			749年		平城 III			
			753年	TK7型式	平城 IV			
			781-784年		平城 V			
					平城 I			
					O-10			

※ 通考須恵器：瀬西1966、山村1968、川江1979、1992、瀬西系須恵器編年：後藤1989、1991、近江編年：松井1995、2004、須恵系須恵器編年：尾野2000

【参考文献】

- 尾野善祐 2000『須恵器(系)須恵器編年の再構築』『須恵器生産の出現から消滅-被土器-瀬西系編年の再構築』東海土器研究会
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
瀬美賢吾 2018『遠江における須恵器編年研究と産業生産史上の展開』『東海考古学展望』東海考古学展望刊行会
浜松市教育委員会 2004『有玉古窯』
浜松市教育委員会 1995『坂内遺跡-遺構・総括編-大和ハウス工業株式会社工場内埋蔵文化財発掘調査報告書』他

目 次

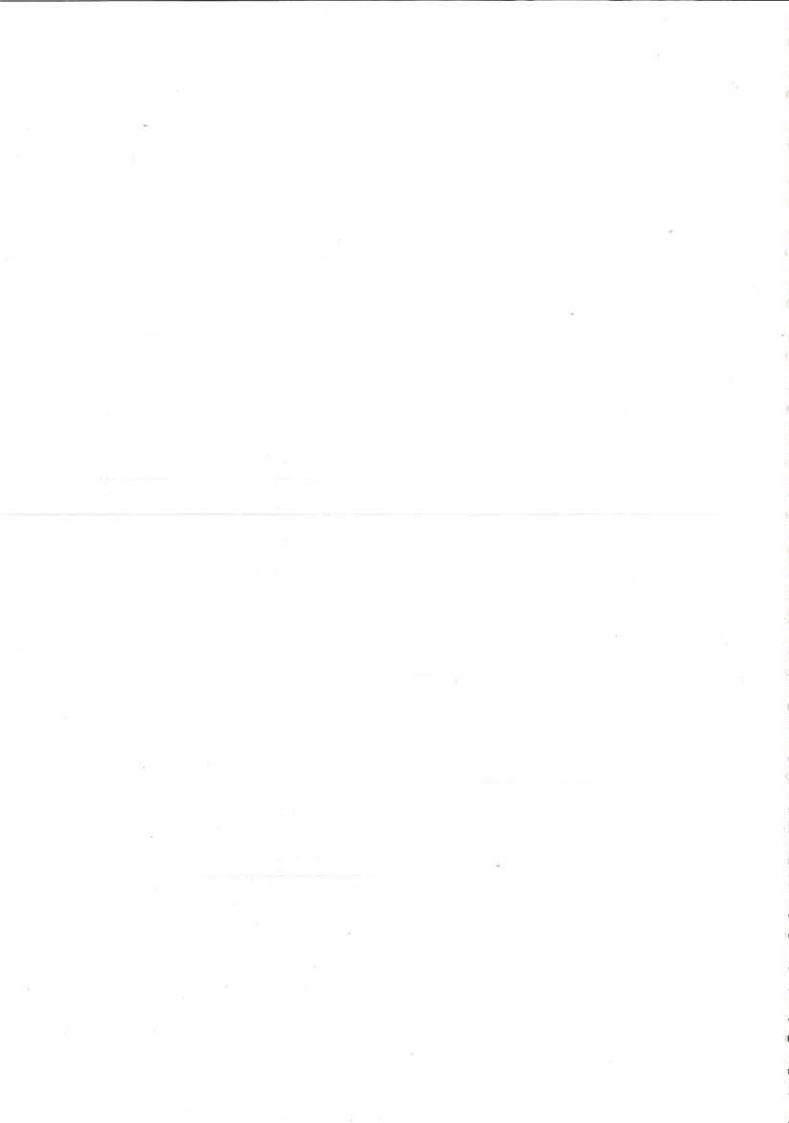
第1章 遺跡の概要	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	3
第3節 調査に至る経過	9
第4節 調査の経過	11
第2章 遺構と遺物	13
第1節 墳丘と埋葬施設	13
第2節 その他の遺構	16
第3節 出土遺物	17
第3章 まとめにかえて	18
引用参考文献	20
写真図版	21

挿図目次

第1図 調査位置図	1	第10図 A-5・A-6号墳調査前地形図	12
第2図 袋井市周辺地質図	2	第11図 A-5号墳実測図	13
第3図 周辺遺跡分布図	4	第12図 A-6号墳実測図	14
第4図 過去2000年間の気候変動図	5	第13図 A-5・A-6号墳主体部・SD1実測図	15
第5図 周辺遺跡分布図	6	第14図 SD2・3土坑群実測図	16
第6図 A-1号墓・A-2～4号墳実測図	7	第15図 出土遺物実測図	17
第7図 A-8号墳実測図	8	第16図 遠江における首長墓の変遷図	18
第8図 A-1号墓・A-2～6号墳旧地形図	9	第17図 周辺の古墳・横穴群分布図	19
第9図 試掘調査トレンチ略図	10		

写真図版目次

写真図版1	写真図版7
1. A-5・A-6号墳 遠景(北より)	13. A-6号墳完掘状況(真上より)
2. A-5・A-6号墳 遠景(真上より)	14. A-6号墳完掘状況(東より)
写真図版2	写真図版8
3. A-5・A-6号墳調査前状況 遠景(北より)	15. A-6号墳 墳丘全景(北より)
4. A-5・A-6号墳調査前状況 遠景(北東より)	16. A-6号墳 墳丘全景(南より)
写真図版3	写真図版9
5. A-5号墳完掘状況(直上より)	17. A-6号墳主体部完掘状況(東より)
6. A-5号墳完掘状況(南より)	18. A-6号墳主体部完掘状況(北より)
写真図版4	写真図版10
7. A-5号墳 墳丘全景(南より)	19. SD2 完掘状況(西より)
8. A-5号墳 墳丘近景(南より)	20. SD3 完掘状況(西より)
写真図版5	写真図版11
9. A-5号墳 主体部完掘状況(西より)	21. A-6号墳墳丘東側土坑群完掘状況(東より)
10. A-5号墳 主体部完掘状況(南より)	22. 調査区内出土遺物
写真図版6	
11. A-5号墳 SD1完掘状況(南より)	
12. A-5号墳 SD1完掘状況(西より)	



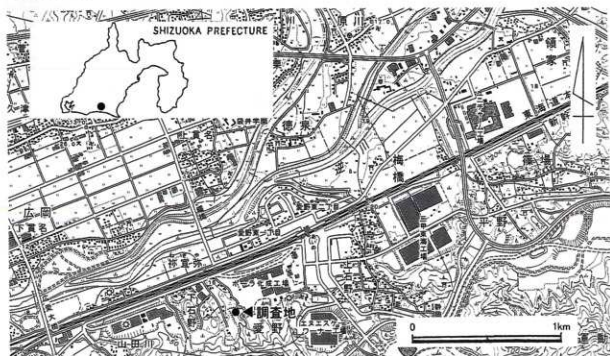
第1章 遺跡の概要

第1節 地理的環境

袋井市は静岡県西部に位置し、遠州灘に臨んでいる。市域の北東から西にかけて斜めに太田川が南流し、中央部では掛川市より西流してきた原野谷川がその流れを大きく南に向け、太田川と合流し太平洋へ注いでいる。市中央部で原野谷川が流れを南側へ変える地点北側には旧東海道の宿場町として発展した袋井地区、そして南側にはJ R 東海道本線袋井駅を中心に栄えた高尾地区が位置し、その南側に諸井地区はある。太田川、原野谷川の両岸に広がる沖積地は袋井市北部、中央部の穀倉地帯となっている。市南部の東側には小笠山丘陵が位置し、市域に含まれる西山麓では小笠沢川や弁財天川、三沢川などの小河川によりやや大きな谷が形成されている。尾根の支稜裾はさらに細かく開析され、浅く短い支谷と尾根が複雑に入り組んだ地形を呈し、小笠山の西麓を深くまで開析する小笠沢川に挟まれた尾根には、J R 袋井駅近くに古墳群や横穴群が点在し、西端の舌状台地には掛之上遺跡や大門遺跡が確認されている。

愛野向山古墳群が立地する愛野地区は、小笠山北西山麓に位置し、原野谷川・逆川・垂木川が合流する付近に形成された沖積地低地を北方に望む、小笠山総合運動公園西側付近から山田川にかけて東西方向に延びる長さ約1.5kmの主尾根から北向きに複数の細い舌状尾根と浅く狭い支谷が入り組んだ地形を呈している。古墳群は、北方に延びる尾根上に連続して築造されていて便宜的に市道下石野10号線を境に東側をA支群、西側をB支群と呼称しているが、立地から見たグループ分けであり、築造順番等の歴史的背景を加味したものではない。

A支群の築造されている尾根付近は、水利には恵まれているが、河川南岸の自然堤防は未発達で、付近に大規模な古墳時代集落は確認されていない。B支群と重複する愛野向山Ⅱ遺跡（弥生時代後期・古墳時代前期）、A支群北東側の沖積低地に確認されている愛野向山Ⅰ遺跡も採集品を見るかぎり弥生時代後期の遺跡と考えられる。最も近い古墳時代後期の集落遺跡は、北東約2km離れた坂尻・原川遺跡や南東約2.5kmの河岸段丘上に分布する掛之上・大門遺跡である。丘陵の北麓という中遠地方では特異な立地を示す愛野向山古墳群の被葬者の生活拠点を明らかにすることは今後の課題となると考えられる。



第1図 調査地位置図



第2図 袋井市周辺地質図 (1/150000 [加藤1985] 功作成加筆)

第2節 歴史的環境

小笠山塊西麓段丘上では長期間にわたる生活の痕跡が確認されている。後期旧石器時代や縄文時代の遺物が発見されているが、明確な遺構に伴うものはない。明確に生活拠点としての痕跡が見られるのは弥生時代中期以降で、温暖期から寒冷期へ移行していく時期と見られる。団子塚遺跡や高尾向山Ⅰ遺跡では弥生時代中期中葉の総数100基からなる方形周溝墓群が確認され、現在の高南地区（古高尾池）を挟んで北側にある掛之上・大門遺跡の住人の奥津城の地であったと考えている。掛之上・大門遺跡において弥生時代中期・後期の遺構数が増えることから、この段丘上には鶴松・徳光遺跡や坂尻遺跡に次ぐ規模の集落が営まれたと考えられる。

中期まで掛之上・大門遺跡の住人の墓域と考えられている団子塚遺跡では、後期になると中期の墓域に重複して集落が出現する。掛之上遺跡を墓域として大門遺跡が居住域となった時期がある。また、この段階で北原遺跡でも集落が営われ始め、団子塚・北原遺跡の墓域は、居住域からやや離れた高尾向山遺跡の方形周溝墓群と考え、この時点で拠点集落であった掛之上・大門遺跡から団子塚・北原遺跡が分村したと考えることもできる。このような集落の拡大、分村という動きは、太田川水系下流域の低地における十二所遺跡群や鶴松遺跡群の成立と発展、掛川市和田岡丘陵遺跡群集落が後期に丘陵部へ進出する動きと同一の現象と考えられる。

袋井市周辺では河川規模は大きくないことから、形成される沖積平野は大きく無く、自然堤防等の微高地の発達も顕著ではない。掛之上・大門遺跡や愛野向山遺跡のような段丘や低位の丘陵上に立地する集落とともに、一色前田遺跡や掛川市八景山遺跡、森町片瀬城遺跡のように環濠をもつ丘陵上の集落が現れる。しかも三沢Ⅳ遺跡のように環濠を持たない丘陵上の集落も現れる。西遠江の後期集落のほとんどが環濠集落であるのに対し、袋井市内は平野部の鶴松・徳光遺跡では環濠らしい溝が見られるが、大多数の集落遺跡では環濠は造られることなく対照的である。この2世紀後半ごろから3世紀にかけて、県内でも遺跡数が急増していることが確認されており、平野部はおおむね水田化したのではないかと考えられ、台地や丘陵上へ集落が進出する時期でもあると考えられる。

西暦113年頃から732年までの温暖期からの寒冷期への移行によって生じた海面低下（海退）に伴い、内陸へ大きく入り込んでいた内海が後退し陸地化し、太田川や原野谷川やその支流は少ない標高差から蛇行を繰り返すことによって、平野部中央の河川両岸に自然堤防を造りだし、その自然堤防上に生活の拠点を造り、周辺に耕作地を展開したと考えられる。稲作は陸稲から始まり水稻へ移行したと見られるが当地ではどの段階で水稻耕作が一般化したかを証明するものはない。具体的に見ると、太田川流域では鶴松遺跡を母集落として、北東から南西にのびる自然堤防上（鶴田Ⅱ・鶴田Ⅰ・川田・平宇・徳光・小山角田・土橋・玉越）へと拡大し、原野谷川流域では坂尻遺跡、小笠山丘陵北西山麓の愛野向山Ⅱ遺跡、西端部の段丘上の掛之上遺跡、小笠山西麓の団子塚遺跡や北原遺跡から市南部の平野部東側を軟粒していたと見られる旧浅羽川と呼称される河川両岸（十二所・小林）へと進出し、初期段階では他地域の文化を受容してきたが、時代が進むにつれ、菊川式と呼ばれる土器様式を生み出す集団へと発展していったことを知ることができるが、首長の一族の墳墓群を特定することはできない。

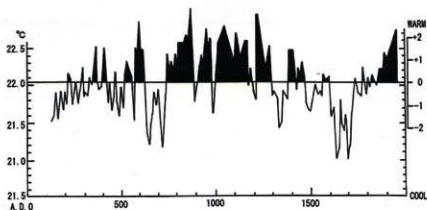
柴田稔氏は『袋井市史』通史編で、弥生時代後期集落の飛躍的増加と農耕地の拡大にともなって、遺跡群（集落）間において、耕地の取得あるいは水利権の確保をめぐる社会的な摩擦が起きたことは予想され、遺跡群（集落）内においても、生産物の分配・保管・耕地の配分、水利をめぐる内紛、人口の多い有力世帯とそうでない世帯との格差などの諸事情による社会的矛盾が原因となって、社会が必要とした特定の権威が、大型古墳に埋葬されるような特定個人を擁立する背景となったと説明している。



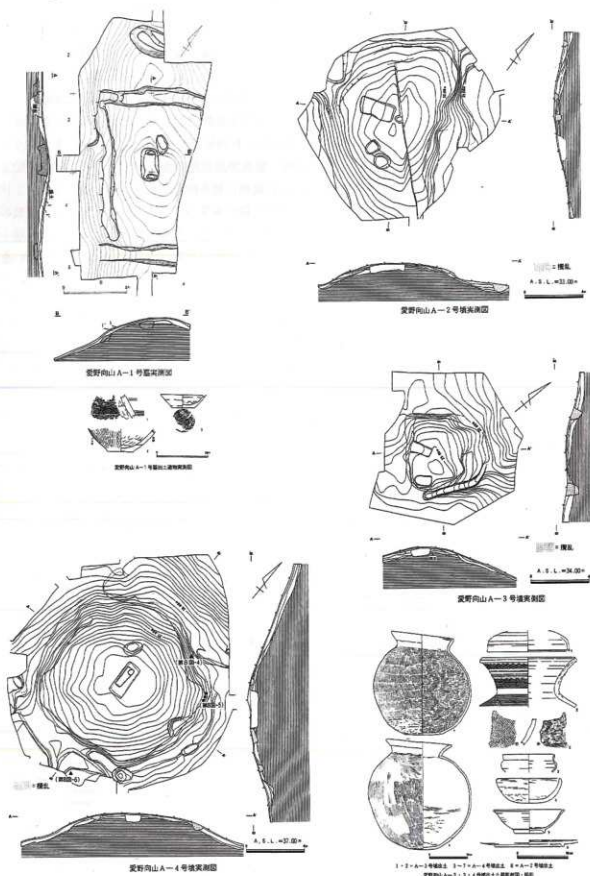
- | | | | |
|------------|--------------|--------------|--------------|
| 93 陣屋内1号墳 | 111 国本Ⅰ遺跡 | 155 能光寺古墳 | 179 愛野向山Ⅱ遺跡 |
| 94 陣屋内遺跡 | 112 国本Ⅱ遺跡 | 157 大門遺跡 | 180 愛野向山横穴群 |
| 95 山下遺跡 | 113 貫名氏館跡 | 159 大門大塚古墳 | 181 愛野向山古墳群 |
| 96 宇佐八幡遺跡 | 128 久能東山古墳群 | 160 地藏ヶ谷遺跡 | 183 愛野向山Ⅲ遺跡 |
| 97 宇佐八幡古墳群 | 129 久能東山遺跡 | 161 地藏ヶ谷横穴群 | 184 愛野向山Ⅰ遺跡 |
| 100 東山古墳群 | 130 日吉神社裏横穴群 | 162 地藏ヶ谷古墳群 | 189 加賀爪氏館跡 |
| 102 浅間山遺跡 | 131 久野城跡 | 163 井守塚古墳群 | 198 宝野金山遺跡 |
| 103 不入斗Ⅱ遺跡 | 132 天白古墳 | 164 大門山古墳群 | 199 宝野金山古墳群 |
| 104 浅間山古墳 | 134 東別所横穴群 | 165 洪垂神社上古墳群 | 245 蔵王権現神社遺跡 |
| 105 権現山遺跡 | 136 東別所古墳群 | 166 堂下遺跡 | 255 袋井宿遺跡 |
| 106 不入斗Ⅰ遺跡 | 149 三門遺跡 | 167 丸尾氏館跡 | 261 各和城跡 |
| 107 原川城跡 | 150 御所森古墳 | 168 大門Ⅲ遺跡 | |
| 108 石ノ形遺跡 | 151 掛之上遺跡 | 173 金山横穴群 | |
| 109 石ノ形古墳 | 152 狐塚古墳 | 177 金山遺跡 | |
| 110 坂尻遺跡 | 153 子持勾玉採集地 | 178 金山古墳群 | |

第3図 周辺遺跡分布図「袋井市文化財地図」部分

支配者や有力者といった一部の社会的エリートのための巨大で内部に多くの副葬品を埋葬する墳墓を造営する風習は汎世界的に見られる習慣であり、この大墳墓には殉死者を伴う場合が見られるが現在の古墳からは確認されていない。墳墓の造営という習慣はとくに古代文明の初期によく見られ、研究者以外にも古代のロマンをかき立てるシンボルティックなものとして万人にも知られているが、この風習は二次国家（すでに4000年前には独自の国家と文明の形成を成し遂げた一次国家の中国に対し、朝鮮・ベトナム等と並んで日本などが二次国家）においても発生途上によくみられ、むしろ二次国家の事例のほうが多く、いままで未開段階の社会がより複雑な文明社会と接触し、その刺激で国家形成の胎動を開始した時に社会的一部の階層による墳墓の造営が顕著であると考えられる。また、二次国家形成期のエリートの墳墓から被葬者と生前直接間接の接触のあった先進的な文明圏からの珍奇な輸入品が発見されており、日本の例をみると、九州の一部の弥生首长墓や古墳から大量に出土する漢式鏡がそれであり、これらの品々は、国家形成期の首长層にとって先進文明圏との政治経済面における接触がいかに重要であったかを如実に現している。文明社会と未開段階の社会のような全く異質な社会が交易を介して接触したときには、両者が無秩序に接触するのではなく、近世の長崎のような交易の接点が設けられる。これを交易港などといい、そこに交易所ないしは商館が置かれ駐在の商人や現地の実力者の管理下におかれる。交易はこのような接点でお互いの社会理論で行われるいわば管理された交易である。この交易では、文明社会では価値の低い物でも未開社会ではきわめて珍重され高価になる場合があり、またその反対の場合もある。このため場合によっては交易用の特殊な物が大量に準備されるなど、特注の物が量産されることがある。この交易港を支配する土着の首长は交易を管理しその利益を独占することで富を蓄積し、交易によりもたらされた文明物を配下や友好関係にある首长層に分配贈与することでその威信を高め権力を築く。この文明物をK・エックホルムの定義する威信財と捉えることができ、威信財をとりまくシステムが弥生から古墳時代にかけての日本社会を捉えるには重要なキーワードとなっていることは間違いない。日本社会は農業の開始から古代国家の形成に要した時間は大変短いことは多くの学者に認められている。この古代化は二次国家として説明される地域には多く見られ、逆に古代化の遅さが一次国家の特徴であることが明らかとなってきた。この内的発展により形成された一次国家での資源をその周辺の階層社会が生産しており、労働の集約化によりその生産増が見込める場合、期に温暖化していた気候は、古墳時代には寒冷期へと移行する。縄文後・晩期以来、雑穀・穀物とともに陸稲や水稲栽培による米がもたらす富によって河川ごとの拠点集落が反映した時代を大きく変化させ、それまでにない広域の地域圏を生み出し、気候変動による食料の減少に伴ってか時代は国家形成のための胎動期へと移行していく。縄文時代のような原始共同体は全面的に解体し、稲作を生業とする新たな村落共同体が形成される。その共同体間の富の蓄積の差



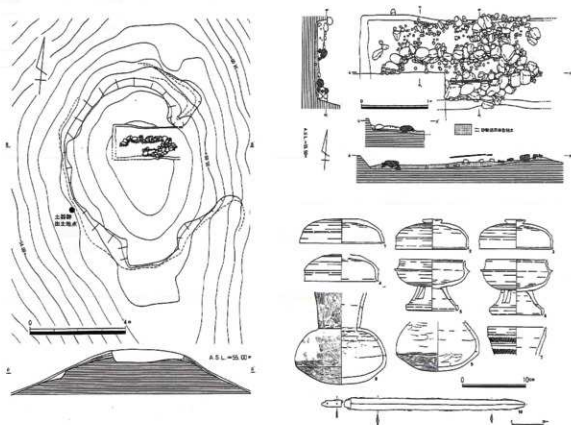
第4図 過去2000年間の気候変動図（北川浩之1995坂口豊1993を一部改変）



第6図 A-1号墓・A-2~4号墳実測図（報告書掲載図より転載）

より8グループに大別し、磐田原台地西南部の古墳群（磐田原南中支群：約40基）を遠淡海国古墳群とし、太田川流域（南部）の古墳群（山名北支群・磐田原東支群・山名南支群：約870基）を久努国古墳群、原野谷・逆川流域の古墳群（佐野西大支群・佐野東大支群：約1,260基）と地域的勢力圏としてのまとまりから国造と古墳群の関係を説明し、「クニ」と意識されていたような政治的権力の存在を説明している。

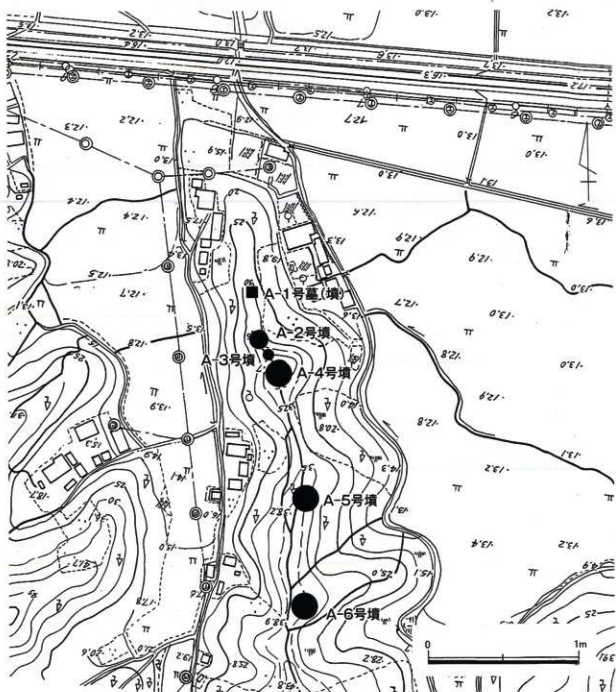
愛野向山古墳群はB群の調査結果から、4世紀代から築造は始まり、5世紀中葉（TK208段階）から造営が爆発的に始まり、5世紀末葉（TK47段階）に入ると五軒平から東西の尾根線上へ造墓域を広めたと考えられる。6世紀前半段階になると、B24号墳に追葬が見られる程度となり、TK43段階で土墳墓も含めて築造は終了する。その後、総数30基程度の愛野向山横穴群の築造が始まる。横穴式石室からなる後期後半の群集墳に比べ、広い範囲に散在的な分布を示し、墳丘規模・主体部構造に大きな差は認められない。十数基に1基の割合で鏡や多量の玉、太刀・剣・鎌などの複数の武器類を副葬する古墳が見られるが、副葬品は総じて貧弱とはいえず、古墳群全体として見れば、前・中期的な要素を色濃く持ち、土器が全く副葬されない点で他地域の後期後半の群集墳と大きな違いを見せていると『静岡県史』資料編2は説明している。



第7図 A-8号墳実測図（報告書掲載図より転載）

第3節 調査に至る経過

愛野向山古墳群の発見は、昭和8年（1933）3月、近くに住む山本作一が通称“五軒平”と呼ばれている場所の開墾によって五鈴鏡を土中から発見したことに始まります。発見直後に現地調査を行った山崎常盤は、その覚書『五軒平出土五鈴鏡』に「墳丘モサシテ極メテ小サク地下二尺位ノ処ヨリ背面ヲ上ニシテ現ハル」と記している。そこには、山本作一の採集品の中に若干の須恵器・土師器片が含まれていたことや、樺は認められなかったことなども付記されている。山本作一らがその後も五軒平の発掘を数回行ったらしいことから、同年5月27日、山崎常盤は再び袋井を訪れ、聞き取りを行い、新たに出土した弥生土器、須恵器片、管玉、ガラス小玉等を調査し、五鈴鏡の出土した古墳は、古墳

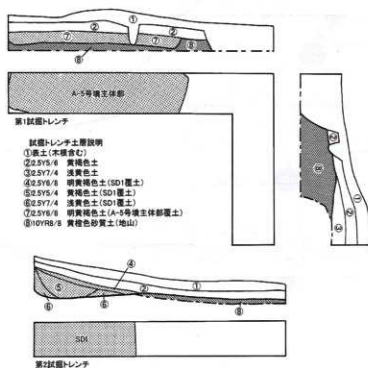


第8図 A-1号墓・A-2～A-6号墳旧地形図（東海道新幹線計画に加筆 1/25,000）

時代後期の群集墳の中の1基である可能性を指摘している。その後、当地北側の東海道本線に並行して東海道新幹線が建設され、当古墳群より西側に立地する地藏ヶ谷古墳群、横穴群が発掘されたが、当古墳群が立地する尾根には至らなかった。しかし、昭和50年代の後半から土石採取事業や工場建設のための敷地造成事業などの大規模開発が盛んになり、古墳群のある尾根の削平が計画されたため、市教委では分布調査を実施し、確認前に消滅した古墳もあるようだが、総数78基の古墳を確認した。便宜的に東側のまとまりをA支群（21基）、西側をB群（57基）と呼称し区分することとした。A群は尾根線上、B群は幅の広い尾根と傾斜地（五軒平）に古墳は立地しているが、両群は途切れることなく連続している。特にB群では、10～18基が周溝を重複させながら密集しているのが確認されたが、全体的に散在的で、尾根の大きな段差や高まりに対応して、1・2基ないしは数基からなる単位群をもって構築されたように見える。これまでの調査によって、A-1号墓は古墳と考えられていたが、方形周溝墓と確認されたものの、多くは円墳ないしは楕円計墳、そして方墳が確認され、尾根の高まりなど自然地形をうまく利用し、墳丘を意識して尾根線上に直交する溝等によって区画し、削り出しによって墳丘を形成したと見られるものが多く、明瞭な盛土を観察できるものは少ない。また、墳丘を意識して尾根線上に直交する溝と傾斜面の山側にのみ区画溝を廻らしたものが大多数を占めると考えられる。密集する中には、径4～5mの小墳が数基見られるが、多くは8～10mを測るもので、盟主墳のような大型墳は見られない。

教育委員会による調査は、昭和60年（1985）にB支群エリア内で大規模な工場進出のための造成工事が行われるための事前調査から始まり、一方、当方のA支群域では、急峻な尾根の形状から地主らより、丘陵の勾配を緩くしたいなどの申し出や、民間事業者による土石採集事業・住宅地造成事業等によって丘陵が削平され始めたため記録保存のため調査が開始された。B支群での調査では方形周溝墓19基、木棺直葬墓1基、土器棺墓8基、古墳24基とともに愛野向山Ⅱ遺跡として91軒の縦穴住居跡が確認され、木棺墓主体部直上から小銅鐸が確認された。また、A-1号墳は当初、前方後円墳と認識されていたが、調査の結果、弥生時代中期後半～後期初頭にかけての細頸壺の出土と、その形状から

方形周溝墓であることが確認された。この墳墓のある同じ尾根にあるA-2・A-3・A-4号墳についても昭和61年（1986）に丘陵削平に伴う記録保存のための調査が実施された。出土遺物から、3基とも6世紀前葉の木棺直葬の方形に近い形状をした古墳であることが確認された。昭和62年（1987）には土石採集事業実施に伴い記録保存のためA-8号墳とともに愛野向山Ⅲ遺跡が調査され、A-8号墳は方墳に近い形状をした造り出しの墳丘で、主軸を東へと向けた舟形の礫床を持つ主体部で、墳丘直上に22基の中世



第9図 試掘調査トレンチ略図

墳墓群が確認された。その後、A-5・A-6号墳を残すような形で北及び西側の斜面は削平され、標高差20mの切り立った崖となり、防災上危険な状況は解消されることなく、勾配の修正などの計画は具体化しなかった。

平成29年になって、すぎや不動産株式会社（代表取締役 中島学）により宅地造成計画が持ち上がり、地主の急傾斜の丘陵への不安も解消するため、南側の土地所有者の協力も得て開発計画範囲の土地買収が進められた。開発に先立ち埋蔵文化財の所在の有無について市教委に問い合わせが行われ、残存状況の確認のため平成30年（2018）4月19日付けで試掘調査の依頼書の提出を受けて5月16・17日に試掘調査を実施した。5号墳推定箇所及び墳丘区画溝推定地他に合計3か所の試掘トレンチをを設定し遺構の残存状態を確認した。その結果、A-5号墳の主体部が依存していることを確認した。その後、A-5号墳及び周囲の愛野向山Ⅲ遺跡を記録保存することで協議を進め、市教委が調査を受託する方向で調整を行い、発掘調査に全面的な協力を約束していただいた。開発主は南側の地主との土地境について確定を行う中、丘陵の高低差が大きく安全勾配で削平し、開発者側の計画に見合う宅地造成を行うため、A-6号墳の所在する箇所まで開発計画の範囲に入れたいとの申し出があり、それを受けて調査範囲の再検討を行い調査に着手した。

発掘調査は令和2年（2020）9月1日～令和3年（2021）3月19日の期間とし、遺構の測量及び調査区全景写真等は有限会社アンスク（鳥田市金谷）が実施した。

調査方法は、墳丘を残して調査対象地をバックフォーにより客土の除去し、ジョレン等により墳丘の検出を行った。現地図面は1/100縮尺、主体部及び遺構は1/10縮尺で実測を基本とした。記録写真は36×24mmフルサイズCMOSセンサーを持つCANON EOS 5D Mark II、レンズはTAMRON AF 28-200mm F/3.5-5.6 LD ASPHERICAL[IF] Super II-Macroによりラージサイズ2100万（5616×3744）画素でJOEGファイル及び2100万（5616×3744）画素のRAWファイルで記録し、Nikon COOLPIX P300（1/2.3型原色CMOS、総画素数12.75メガピクセル）でも12M（4000×3000）の画素数で記録した。

第4節 調査の経過

令和2年（2020）9月前半にまでに調査区内の樹木の伐採と現状地形測量を実施し、その後、現地事務所などを調査区北側の宅地造成計画地内に設置を行う。9月17日より重機により調査区内の表土除去を開始する。なお、この段階で出土遺物は確認されていない。その後、発掘機材を現場事務所に運び込み、本格的な発掘調査の準備を行う。10月12日より作業員を動員して調査区南側のA-6号墳から墳丘上の覆土や樹根の除去作業を開始する。14・15日にはA-5号墳の主体部確認作業を行い、16日にA-5号墳南側においてpitと見られる遺構が検出された。この時点では愛野向山Ⅲ遺跡の関係遺構と考えていた（後に精査の結果、遺構では無いことが判明）。19日から再びA-6号墳の遺構確認を行う。A-5号墳の主体部は24日、A-6号墳主体部は26日から掘り下げ作業を行うための遺構範囲確認作業を行う。両古墳の主体部とも掘り込みは確認できたため、慎重に掘り上げを行う。11月16日からは調査区全域の樹根付近の覆土除去作業と両主体部の完掘作業と堆積状況の作図及び写真撮影を行い、覆土のふりい掛け作業も行うが、副葬品などの出土遺物は確認できなかった。12月7日までに5号墳南側の区画溝（周溝）及び溝（SD2・3）の掘削、並行して6号墳の東側の土坑群の掘削を行った。その後、全景写真撮影のための清掃を行い、10日に調査区全景の写真と測量を行い、現地調査は終了した。令和3年1月からは図面・写真の整理作業及び出土遺物の実測作業を行った。



第10図 A-5・A-6号墳調査前地形図

第2章 遺構と遺物

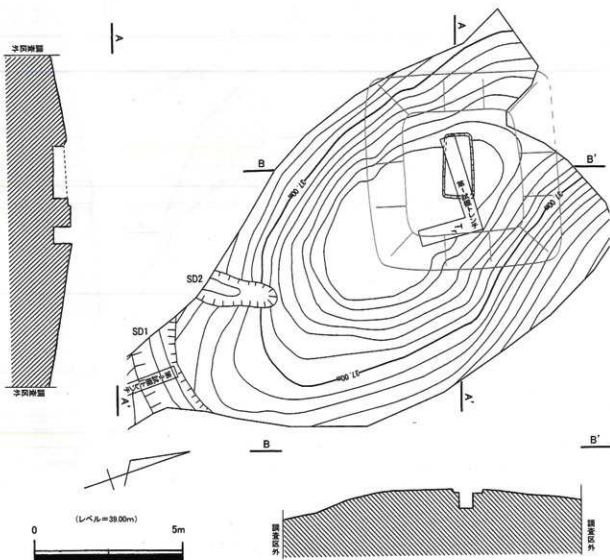
第1節 墳丘と埋葬施設

1. 古墳の状況

愛野向山古墳群A-4・A-5号墳は南北にのびた丘陵上には、多くの古墳が築造されていて、すでにA-1墓～A-4号墳は開発により消滅しており、A-5号墳北側まで尾根は削り取られていた。また、A-6号墳西側及び南西側も同様に削平されており旧況を残していなかった。また、A-8号墳のように墳丘直上に中世の墳墓群なども確認することはできなかった。A-6号墳は自然地形に近く、外見的に墳丘と見なすことさえ困難な状況で、A-7号墳の当初推定地のように別時代の遺跡とも考えられていた。

(1) A-5号墳

A-5号墳は分布踏査及び試掘調査により、主体部及び周溝と見られる区画溝が依存していることが判明していた。墳丘は南北6.0m×東西6.0m、高さ0.5mを測り、上部は当初人工的に盛土によって造られた部分の1.5m以上が失われ、削り出された丘陵のみが残されていると見られるため、南側に尾根が残るような形で見かけ上A-8号墳のような墳丘を呈しているが、方墳と考えられる。A-5号墳の南側はA-8号墳のような突出部ではないと考えられる。尾根上の自然の高まりを利用して築造されて



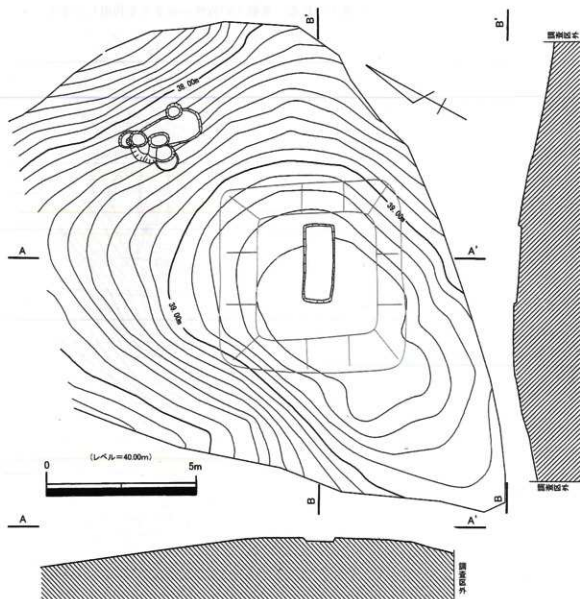
第11図 A-5号墳実測図

いて、現在の墳頂部の平坦面は標高37.6mを測る。出土遺物や葺石等は見られなかった。また、墳頂部から南側約7.0mの場所に尾根と分断するための溝状遺構SD1（幅1.04m）が確認された。

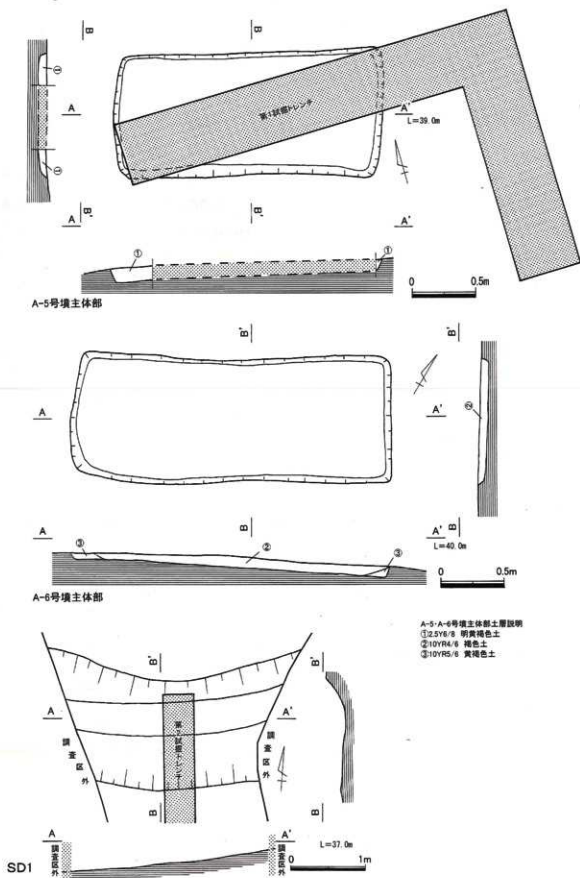
主体部は墳丘中央部に長方形の掘方（長さ2.15m、幅0.98m）のみ確認され、主軸方向N-72°-Wをなす。墳丘の盛土の後に掘り込まれたと見られる掘方は地山（小笠山礫層）した0.12mまで達しており、礫床等はなく、小砂利を多数含む明黄褐色土（2.5Y 6/8）で満たされていた。副葬品は無い。

(2) A-6号墳

A-6号墳はA-5号墳の南72mに位置する。調査前状況は自然地形のようで古墳の形状を確認できるものは見受けられなかった。墳丘は南北5.8m×東西6.0m、高さ0.2mを測り、上部は当初人工的に盛土によって造られた部分の1.5m以上が失われ、削り出された丘陵のみが残されていると見られるため、南側に尾根が残るような形で見かけ上A-8号墳のような墳丘を呈しているが方墳と考えられる。A-6号墳の南西側はA-8号墳のような突出部ではないと考えられる。尾根上の自然の高まりを利用して築造されていて、現在の墳頂部の平坦面は標高39.4mを測り、A-5号墳より標高が高い。出土遺物や葺石等は見られない。



第12図 A-6号墳実測図

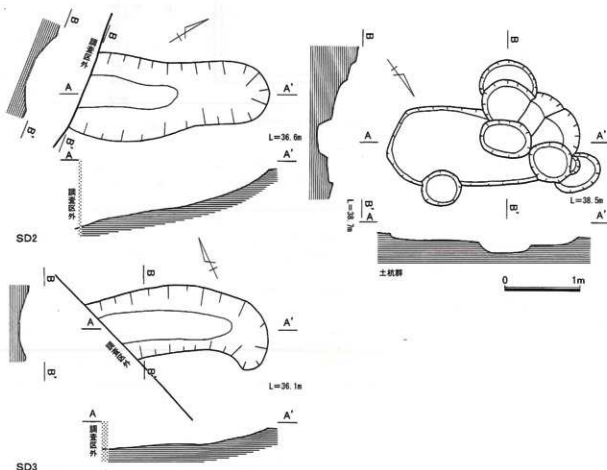


第13図 A-5・A-6号墳主体部・SD1実測図

主体部は墳丘中央部に長方形の掘方（長さ2.55m、幅1.00m）のみ確認され、主軸方向N-28.4°-Eをなす。墳丘の盛土の後に掘り込まれたと見られる。掘方は地山（小笠山礫層）下0.80mまで達しており、礫床等は無く、小砂利を多数含むオリブ褐色土（25Y 4/6）で満たされていた。副葬品は無い。

第2節 その他の遺構

A-5号墳南側からSD2・3が検出された。出土遺物は無く、時期は特定できない。A-6号墳墳丘東側斜面に土坑9基（径0.7～0.3m、深さ0.1～0.7m）が確認された。近接して互いに切り合う遺構群で、直接地山を掘り込んでいる。周辺には平場は無く、住居等の生活の場として使用された痕跡が無いことから、土壌墓である可能性が高いが特定はできない。愛野向山Ⅲ遺跡に伴うものと考えられ、出土遺物が無く時期不明であるが、調査区内から出土した遺物と同時期であれば弥生時代中期中葉に属すると考えられなくもない。



第14図 SD2・3土坑群実測図

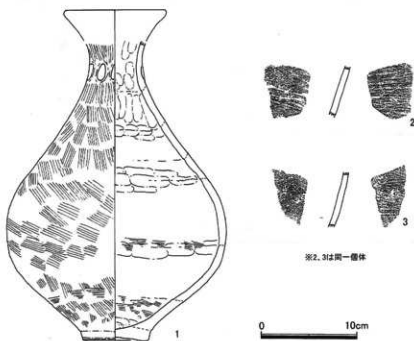
第3節 出土遺物

本調査では、A-5号墳およびA-6号墳の主体部や古墳に伴う出土遺物は無く、両古墳主体部に近接した墳丘造成土中から、愛野向山Ⅲ遺跡に伴う遺物のみが確認された。

1は調査区北側から出土した細頸壺で、最大径は比較的低く、頸部には指押文が廻らされ、体部は刷毛目調整痕のみとなっている。底部には木葉痕は見られない。横倒し状態で口縁を失い、全体の約1/2近くが確認された。

2及び3は調査区南側より発見された深鉢で同一個体と見られるもので、図示したもの以外にも十数片が確認されたが、総て胴部で口縁及び底部等の大半が欠損した状態だったと考えられる。外面調整は粗い条痕によって整えられ、内面調整はヘラケズリによって薄くした後、ヨコナデで仕上げられている。また、外面には若干スグが付着している。

細頸壺(1)及び深鉢(2・3)はともに弥生時代中期中葉の嶺田式の範疇に入ると考えられるが、細頸壺(1)は赤彩も無く、指押文のみで竹管を多用した装飾文も無く簡素なので、深鉢(2・3)とは時期が異なる可能性がある。これら2点は遺構に伴うものでは無く、出土状態から見て、細頸壺(1)墳丘造成時にはすでに横倒しの状態で埋設していたのを古墳築造のため表土に近い上方を大きく欠損したのではないかと考えられ、深鉢(2・3)は一か所にまとまっていたが、器形を保った状態での出土ではなかったため、土器棺と使用されたものが古墳築造で破壊されたものとも推定できなくもない。

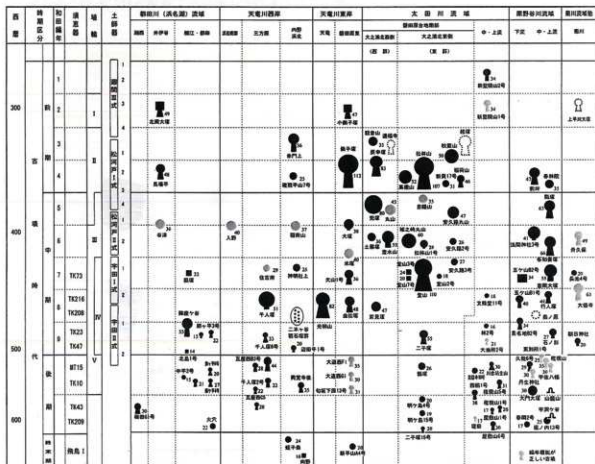


第15図 出土遺物実測図

第3章 まとめにかえて

調査の結果、A-5・A-6号墳の2基は木棺直葬の主体部を持つ古墳であることが明らかとなった。出土遺物が確認されなかったことから、直接的に築造時期の特定は困難だが、主体部の構造やその規模から見て、同じ尾根線上のTK23からTK47号窯段階の5世紀後半のA-8号墳より新しく、北側のA-2・A-3・A-4号墳に遠くない時期、6世紀前半期（MT15～TK10号窯段階）と推定したい。今回調査の2基の古墳はA-2・A-3・A-4号墳の報告書でも触れていたように、「横穴式石室墳からなるいわゆる後期群集墳に比べ1世紀近くも遡る」もので初期群集墳とも呼ぶべきものである。初期群集墳の動向については『金山古墳群・金山横穴群Ⅰ・Ⅱ』（1996）の考察に詳しく、初期群集墳は5世紀後半段階で愛野向山B支群から築造が始まり、6世紀前半段階になると、原野谷川水系では愛野向山古墳群A支群や愛野向山古墳群B支群A・C地区・地藏ヶ谷古墳群・井守塚古墳に見られるように各丘陵上で築造が始まり、小笠沢川流域でも金山A古墳群や谷坂古墳群、雲座古墳群などが成立してくる。その後、発展的に原野谷川中流域南岸では地藏ヶ谷横穴群や金山横穴群の築造へ移り、小笠沢川流域では長者平古墳群や山本山古墳群・団子塚古墳群の築造が始まる。

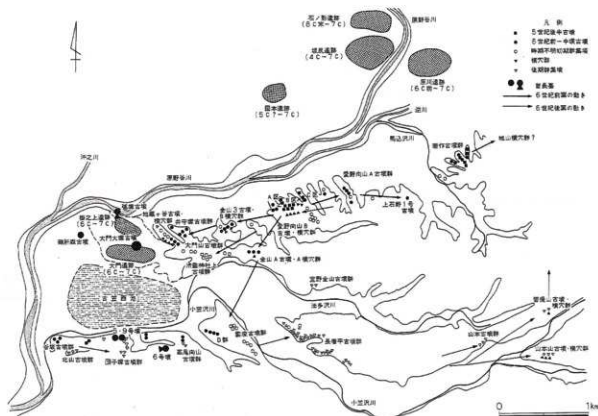
『先代旧事本紀』巻第一〇「国造本紀」によると、当地域では久努国造・素賀（曾我）国造の名が見える。久努国造は遠江国を代表し国名を負う遠淡海国造より、やや遅れて仲哀朝にその領域の一部を割譲する形で分立したのではないかと推定されており、素賀国造は物部宗家の滅亡後に物部氏影響を払拭するために取り立てられた蘇我氏の関係者ではないかと推定でき、中央での蘇我氏の影響力を



第16図 遠江における首長墓の変遷図（『松林山1号墳発掘調査報告書』[磐田市教委2015]掲載図に加筆）

背景に久努国造領域や同族の佐夜直領域を飲み込み支配領域（国郡制発足時の「佐益郡」域）としたと『静岡県史』通史編1では説明する。そのため、養老6年（722）に佐益郡から8郷を割譲して山名郡が独立したことと真意は、「大宝元（七〇一）年の国郡制の発足時は勿論、それに先行する七世紀後半の国評制の時期にも、袋井市の原野谷川以北から掛川市にかけての地域は、政治的に一つのまとった地域であったと考えられる」と袋井市史では説明しており、中央では大化元年（645）に蘇我宗家の影響は一掃されるが、地方には蘇我の影響は残り続け、養老年間に入ってから蘇我宗家の影響から解放され、旧来の物部系の久努国造の領域とみられる太田川水系平野部と素賀国造の領域と見られる原野谷川・逆川水系平野部が別の行政単位として再設定し直したものと考えられる。

愛野向山古墳群の被葬者は両国造のどちらかの勢力に組していたのかについては、愛野向山古墳群A支群の築造が終了した後の6世紀後半以降に、その立地から小笠沢川流域に墓域を持つ集団は、太田川水系の磐田原東縁古墳群で、竜文銀象嵌鞘口を刀装具とする大刀を副葬した明ヶ島15号墳（円墳：横穴式石室）や二子山15号墳（前方後円墳：横穴式石室）などを首長墓とする勢力へ、原野谷川・逆川両水系南岸の古墳群・横穴群被葬者集団は、逆川と倉真川の合流地点近くに立地する宇洞ヶ谷横穴（掛川市下俣・宇洞ヶ谷）や山麓横穴（掛川市下俣・堂伝）などの首長墓とする勢力に組みしたと推定できなくもない。そしてこの原野谷川・逆川水系勢力が素賀国造であり、太田川水系勢力が久努国造ではないかと考えることができる。この両国造の墓制について見ると、久努国造については横穴式石室墳と明ヶ島古墳群の主体となる横穴式木室墳が見られる。素賀国造については横穴墓と横穴式木室墳という異なる墓制を採用している。つまり素賀国造は横穴墓を採用する集団と横穴式木室墳の集団の2系譜の集団によって擁立されていたと考えられ、本来的と見られる横穴墓集団だけでは成立しなかったのではと推定されている。



第17図 周辺の古墳・横穴群分布図（『金山古墳群・金山横穴群Ⅰ・Ⅱ』[1996]掲載図に加筆）

久努国造や素賀国造の支配の実像や拠点地の特定や首長と構成員が必ず同じ墓制を採用するかという問題点など、古記録と考古学的資料との間に整合性が図られなくてはならないため、今後の資料成果の蓄積を待ちたい。

最後に、株式会社すぎや不動産をはじめとして宅地造成事業の関係者の方々ならびに袋井市スクールガードリーダーの海野 純 氏、地元の愛野自治会連合会長の朝比奈 馨 氏、柿原自治会長の兼岡正利 氏をはじめ、愛野地区の各自治会長の皆様は調査に対して理解を示して下さり、様々なかたちでご協力いただきました。調査期間中にお世話になった皆様にあらためて感謝の意を申し上げ、更なるご協力とご指導をお願いして結びとしたい。

引用参考文献（順不同）

- | | | |
|--------------|------|--|
| 袋井市 | 1983 | 『袋井市史』通史編 |
| 浅羽町 | 1997 | 『浅羽町史』資料編一 考古・古代・中世 |
| 静岡県 | 1990 | 『静岡県史』資料編1 考古一 |
| 静岡県 | 1990 | 『静岡県史』資料編2 考古二 |
| 静岡県 | 1992 | 『静岡県史』資料編3 考古三 |
| 静岡県 | 1994 | 『静岡県史』通史編1 原始・古代 |
| 袋井市教育委員会 | 1986 | 『昭和60年度国庫補助事業発掘調査報告書』-愛野向山A1号墓緊急発掘報告書- |
| 浅羽町教育委員会 | 1992 | 『五ヶ山A-1号墳』発掘調査報告書 |
| 浅羽町教育委員会 | 1993 | 『五ヶ山B-1号墳』発掘調査報告書 |
| 浅羽町教育委員会 | 1999 | 『五ヶ山B2号墳』発掘調査報告書 |
| 磐田市教育委員会 | 2003 | 『東部土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 |
| 磐田市教育委員会 | 2011 | 『鎌田・嶽影遺跡第19・20次発掘調査報告書』 |
| 磐田市教育委員会 | 2015 | 『松林山1号墳発掘調査報告書』 |
| 浜松市教育委員会 | 2004 | 『有玉古窯』発掘調査報告書 |
| 豊川市坂ヶ丘ミュージアム | 2020 | 特別展『いにしへの響き』図録 |
| 袋井市教育委員会 | 1987 | 『愛野向山A-2・3・4号墳』-昭和61年度緊急発掘調査概報- |
| 袋井市教育委員会 | 1988 | 『愛野向山A-8号墳 愛野向山墳墓群 愛野向山Ⅳ遺跡』発掘調査報告書 |
| 袋井市教育委員会 | 1995 | 『坂尻遺跡』大和ハウス工業㈱中部工場内埋蔵文化財発掘調査報告書-遺物・総括編- |
| 袋井市教育委員会 | 1996 | 『井守塚古墳群』発掘調査報告書 |
| 袋井市教育委員会 | 1996 | 『金山古墳群・金山横穴群Ⅰ・Ⅱ』発掘調査報告書 |
| 袋井市教育委員会 | 1996 | 『八幡山横穴群』発掘調査報告書 |
| 袋井市教育委員会 | 2004 | 『愛野向山Ⅱ遺跡』発掘調査報告書 |
| 袋井市教育委員会 | 2015 | 『掛之上遺跡』袋井駅前第二土地区画整理事業に伴う第95次〜106次発掘調査報告書 |
| 袋井市教育委員会 | 1991 | 『袋井市三沢古墳群』昌栄造建土石採集事業に伴う三沢2号墳緊急調査報告書 |
| 袋井市教育委員会 | 1992 | 『団子塚遺跡』発掘調査報告書 遺構編 |
| 袋井市教育委員会 | 2017 | 『団子塚古墳群H-1号墳発掘調査報告書』遺構編 |
| 坂口 豊 | 1993 | 『大牧5号墳発掘調査報告書』 |
| 北川浩之 | 1995 | 『与島古墳群』飛騨東部第一地区上切団地農地造成に伴う発掘調査報告書 |
| 小泉 格 | 2007 | 『気候変動と文明の衰退』『地学雑誌』116 (1) 62-78 |

写真図版





1. A-5・A-6号墳 遠景（北より）



2. A-5・A-6号墳 遠景（真上より）



3. A-5号墳・6号墳調査前状況 遠景（北より）



4. A-5号墳・6号墳調査前状況 遠景（北東より）



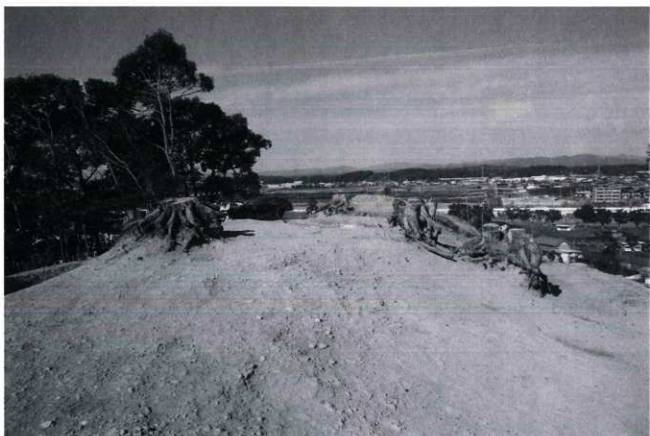
5. A-5号墳完掘状況（直上より）



6. A-5号墳完掘状況（南より）



7. A-5号墳 墳丘全景（南より）



8. A-5号墳 墳丘近景（南より）



9. A-5号墳 主体部完掘状況（西より）



10. A-5号墳 主体部完掘状況（南より）



11. A-5号墳 SD1完掘状況（南より）



12. A-5号墳 SD1完掘状況（西より）



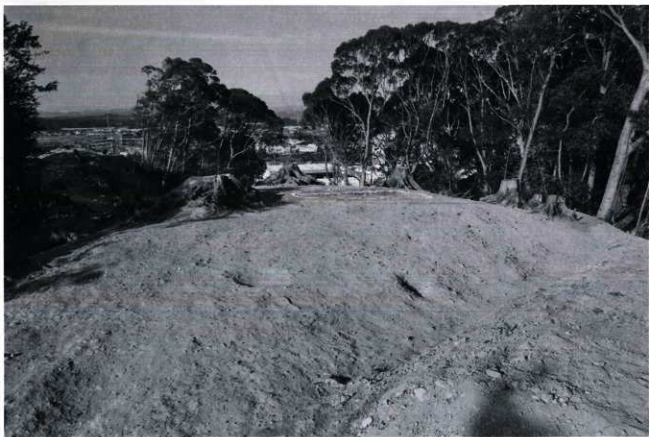
13. A-6号墳完掘状況（直上より）



14. A-6号墳完掘状況（東より）



15. A-6号墳 墳丘全景（北より）



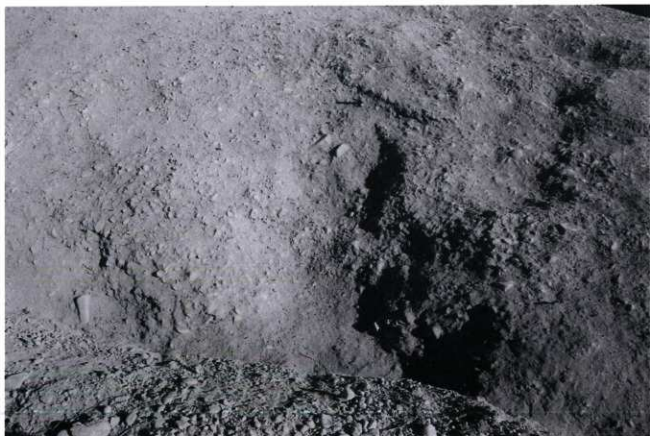
16. A-6号墳 墳丘全景（南より）



17. A-6号墳主体部完掘状況（東より）



18. A-6号墳主体部完掘状況（北より）



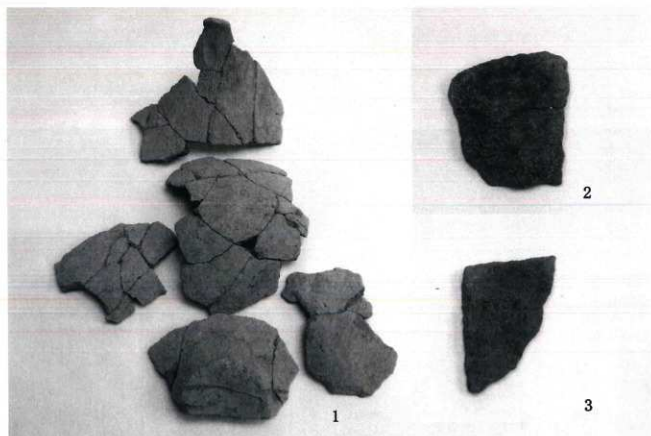
19. SD2 完掘状況（西より）



20. SD3 完掘状況（西より）



21. A-6号墳墳丘東側土坑群完掘状況（東より）



22. 調査区内出土遺物

報告書抄録

ふりがな	あいのむかいやまこふんぐんA-5・A-6ごうふんはくつちようさほうこくしょ							
書名	愛野向山古墳群A-5・A-6号墳発掘調査報告書							
副書名	住宅建設用地造事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
編著者名	水野雅彦							
編集機関	静岡県袋井市教育委員会 〒437-0013 静岡県袋井市新屋一丁目2番地の1 TEL:0538-23-9264							
発行機関	静岡県袋井市教育委員会 〒437-0013 静岡県袋井市新屋一丁目2番地の1 TEL:0538-23-9264							
発行年月日	2021年3月19日							
所収文化財名	愛野向山古墳群・愛野向山Ⅲ遺跡							
文化財所在地	静岡県袋井市愛野							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界地測系		調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
あいのむかいやまこふんぐん 愛野向山古墳群 A-5・A-6号墳	しずおかけん 静岡県 あぐいしあいの 袋井市愛野 字向山 2368、 2367-2	22216	181	(A-5号墳) 34° 44′ 51″ (A-6号墳) 34° 44′ 49″	(A-5号墳) 137° 57′ 21″ (A-6号墳) 137° 57′ 22″	現地調査 令和2年10月9日 ～令和2年12月10日 資料整理 令和2年12月11日 ～令和3年3月19日	443.66㎡	宅地造成事業
				183	34° 44′ 49″			
あいのむかいやま 愛野向山Ⅲ遺跡								
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
愛野向山古墳群 A-5・A-6号墳	古墳	古墳時代	方墳、木棺直葬					
愛野向山Ⅲ遺跡	その他の墓	縄文～ 中・近世	土坑、溝		包含層出土土器(弥生土器)			

住宅建設用地造事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

愛野向山古墳群
A-5・A-6号墳発掘調査報告書

発	行	令和3年3月19日
編集・発行		袋井市教育委員会
印	刷	松本印刷株式会社